

特集 IAML / IMS CONFERENCE - AMSTERDAM 2009

2009年7月5日より10日まで、アムステルダムにおいて開催された大会の報告です。

支部長(代表参加者): 金澤正剛氏 ...p.1

副支部長: 藤堂雍子氏 ...p.5

RILM 国内委員長 樋口隆一氏 ...p.10

参加者 関根和江氏 ...p.12

写真は特に記載のない限り執筆者提供。⊕は樋口隆一氏提供。

アムステルダムの大会に参加して

金澤 正剛

今年7月5日から10日にかけてアムステルダムで開催されたIAMLとIMSの合同会議に関しては、さっそくIAMLの電子レター第33号に詳細な報告が掲載されている。編集を手がけたMichael Fingerhutの手腕に感心するあまり、メールで敬意を表したところ、折り返し返事が来て、それは事務局のRoger Fluryが完璧な記録を会議が終わるとすぐさま送ってくれたおかげだ、私はそれをそのまま載せただけだと言ってきたが、29ページに及ぶ全体の構成といい、写真やイラストを数多く、しかも効果的に入れたセンスといい、各ページから会議の雰囲気そのまま再現されていて、まことに申し分ない。未だご覧になっていない方は目を通すだけでも良いから、まずは見てご覧になることをお勧めする。

ところでこれほどまでに詳しく会議について書かれてしまえば、今更何を報告して良いものか分からない。しかも一緒に参加した藤堂さんたちからもさらなる報告があるであろうことを考えると、なるべく重複したレポートには

したくない。そこでここでは私自身の経験にもとづいて、感じたことを書かせていただこうと思う。かなり偏った、独断的な報告になるかも知れないが、なにとぞお許し願いたい。ただしそれを通じて少しでも会議の空気を感じていただけたら、と思う。

7月4日の朝、アムステルダムに向かうべく成田に着いたら、目の前に樋口隆一君が居た。同じオランダ航空を予約していて、機内では私が左、彼が右、首を廻せば目が合う席に指

定され、最初から心強い旅となった。宿泊も同じアムステルダム中央駅前のホテル・ヴィクトリアということで、空港地下の駅から電車に乗って約半時間、一旦くつろいで下のロビーで落ち合い、乾杯したところで気付いてみると午後5時半を少し回ったばかり。会議のレジスト



運河にて⊕



跳ね橋⊕



橋の町アムステルダム⊕

レーションはその日6時までであることを思い出し、行ってみようということになり、行ってみるとまさに6時きっかりに会場に着き、無事レジストレーションを済ますことが出来た。その後2人でホテルの前から観光船に乗って市内を一周した。すでに8時というのにあたりはまだ明るくのんびりした午後と言う雰囲気、水上から市民の生活を観察したが、大都市とは思われない余裕と品格を感じた。



アムステルダムの町並み㊤

翌日は、評議員会（カウンスル）が始まるのが午後2時ということで、朝のうち市電に乗って国立博物館に行ってみた。国立博物館は現在修理中で、建物の一部を使って代表的な作品を選んで展示していたが、おかげでレンブラントの『夜警』やフェルメールの『牛乳を注ぐ女』などの名画をゆっくりと見ることが出来た。後で分かったことであるが、近くのゴッホ美術館は日本並みの混雑振りで、入場するのも長い列が出来ていたそうである。博物館からの帰りはホテルまで歩いてみることにした。スヴェーリンクゆかりの古教会を目指して歩いたが、前日の船旅のおかげで地図に頼ることなく、運河脇の木陰の道を楽しみながら迷うことなく目的地に着いた。着いてみるとちょうど礼拝が終わって門が閉じられたばかりのところ、中に入りたければ午後1時からと書いてあったので、残念ながら別の日に出直すことにした。ところが教会に隣接する有名な飾り窓は日曜日の昼だというのに営業中で、裸の美女に手招

きされたのにはびっくりした。売春も薬物も合法的なオランダ、にもかかわらず両者を厳しく禁止する日本にくらべ、陰湿な暗さなど全く無く、健康的な雰囲気に含まれているのは一体どうしたことか。すっかりと考えさせられてしまった。

さて昼食後、会場のアムステルダム音楽院へと向かったが、そのあたりは市の新しい計画で建設中の地域にあたり、すでに完成していた筈の大通りも建設中とあって、仮設の歩道橋を歩いて行くとやがて目の前に3つの似たようなガラス張りの建物が現れる。左から順に市立図書館、音楽院、そして郵便局ということであるが、郵便局は営業中とはいえ建物は未完であることがひと目で分かるような状態である。主会場である音楽院の入口を入ると壁ひとつ隔てて広いフォワイエとなる。正面にはコーヒーやスナックが用意されているカウンターがあり、そのちょうど反対側、建物に入った目の前の壁の裏側に大会本部の受け付けカウンターがある。さらにこの2つのカウンターの間の左右両側に、オックスフォード大学出版部を始めとする展示デスクが並び、参加者の興味をひこうとさまざまな工夫をこらしているのが面白かった。以後5日間において、このフォワイエは休憩時間のコーヒー・タイムを過ごす場所として使われたが、大会参加者が予想以上に集まったということで、日増しに混雑ぶりが飽和状態に近づき、最後はどこに誰が居るのか、探すのが至難な状態までとなった。しかしそれにはそれなりの解決策がある。私はすぐさま2階にオープンなバルコニーがあることに気がついた。それはちょうど大会



(左) パブリック・ライブラリー㊤

(下) 音楽院㊤



本部の受け付けカウンターの上であり、そこから見渡すと下のフォワイエの様子が隅から隅まで見渡せるようになっている。そこから人々の居場所を確認して、その場所に直行する。しかしそれでも途中で人ごみに阻まれて、目的の人物を捕えそこねるといったことが、何度もあった。

午後2時の評議員会は音楽院1階の後部半分を占めるハイティングザールで行われたが、入口で24項目からなるアジェンダを渡されて、その長さにもまぶびっくりした。なるほどそのため前半をこの日の内に済ませ、後半を木曜日の午後にやるのだと納得した。司会は会長の Martie Severt、開口一番アジェンダが多いので発言はなるべく手短かにという前置きで始まったものの、実際には順調に会長の開会宣言、昨年の議事録の承認、会長、事務局長、会計のレポートと議事が進み、予定時刻以前に前半は目出度く終了することになった。なかでも特に注目された議題は来年行われる会長と副会長の選挙で、規定により会長候補2人はすでに決まっているという。ひとりとは他ならぬ現在事務局長を務めている Roger Flury で、もうひとりとは現在プログラム・コミッティーを担当している Jim Cassaro である。いずれも有能な候補者であることには疑いない。皆さんも来年の選挙にそなえて2人のこれまでの活動に注目していただきたい。



事務局長 Roger Flury 会長 Martie Severt ㊤

翌日の午後4時からはナショナル・レポートということで、いよいよ私の出番である。藤堂さんと2人で待機していると、議長の Severt が飛んで来て、ひとりの持ち時間1分半でお願いしたい、という。そんな無茶なと思ったが、他の発表者も思いは同じであつたらしい。中にはそれを無視して予定通りたっぷり報告を読み上げるつわものも居たが、私は何とか要点だけを報告して、詳しくはフォンテスの次号

を読んで下さいと締めくくった。果たして何分の報告だったのか計ってみるべきであったと、後になって後悔したが、会議が終わってから議長から、協力してくれて有難うと感謝されたところをみると、十分短かかつたらしい。なおその縮小版はすでに電子ニュースレターに載っているし、全文はフォンテスに掲載されることになっているので、読んでみていただきたい。



金澤正剛支部長による
ナショナル・レポート㊤

今回の会議は発表といい、シンポジウムといい、内容の濃いものが多く、大いに満足出来るものであった。聞くところによると、発表の申し込みが予想以上に多く、選ぶのに苦労したという。なかにはびっくりするほどの大物の発表を断ったという例もあつたらしい。会場は音楽院の大小5室、隣の図書館の4室を充てたが、時には全会場で同時進行などという場合もあり、しばしばどこに行くべきか選択に困った。しかもこれは聞いておきたいという発表に限って同じ時間に同時進行ということが多い。ある日は目的の会場を目指して移動中に、リュート音楽のパネルの議長を務めるメルボルン大学の John Griffiths につかまり、「勿論来てくれるんだろうね、フロアからの発言を期待しているよ」と連れて行かれてしまった。ところが始まってみると、それぞれのパネラーの発言が熱心で、フロアにまわる前に時間切れとなつてしまった。そのように充実したセッションが多く、日本からは樋口君



沼野雄司さん㊤

が前田育英会蔵のモーツァルト資料について、沼野雄司君が現代記譜法とその演奏に関する問題について発表したが、いずれもIMSのセッションにおいてであった。

最後の日の晩は町の中央広場に面するホテル・クラスナボルスキーに場所を変えて、フェアウェル・ディナーが催された。ホテル自体も歴史的な建物であるが、会場となったウィンター・ガーデンは文化財に指定されているということで、天井も高く、広々として、まさに最後のパーティーを催すのに理想的な場所であった。入口でひとりずつバラの花を渡されたが、それによってメインディッシュの選択が分かるようになっていて、赤のバラは肉料理、白は魚料理、黄色はヴェジタリアンということで、時が来ると思い思いの席を取ったところでウェーターが3種類の料理を運んできて、バラの色に合わせて配ってまわるという、なかなか粋なサービスであった。しかしこの時も会場は人の波で埋め尽くされ、方々に別れを惜しむ姿が見られたものの、中には目的の人を見つけられずにさまよい歩いている人も少なくなかった。

今回のようなIAMLとIMSの合同大会が重要なのは、なんといっても音楽図書館員と

音楽学者が気軽に交流することの出来る機会が与えられることである。もっともIAML日本支部の会員には音楽学者が少なくないが、他の国の支部ではなかなかそのようにはいかならしく、このように音楽学者たちと親しく話し合えるのは大変嬉しい、と何度か言われた。実のところ私自身、IAML日本支部の支部長を勤めてはいるものの、外から見ればはっきりと音楽学者として意識されて(というか、表現は悪いが分類されて)いるのを感じた。もっともそれは決して悪いことではなく、それぞれお互いの立場を十分認識して付き合っていくことが大切であると思う。また一方ではこのような会を通じて、IAMLとIMSの性格、ないしは特徴の違いがはっきりと感じられたのも貴重な経験であった。そのような違いはIAMLが毎年大会を催しているのに対して、IMSの大会は5年に1度(もっともその間に臨時の会が入ることはあるが)というところにも現れている。次回の大会は、IAMLは来年モスクワで、IMSは3年後にローマで開催される。日本からも多くの参加者があることを期待している。

(かなざわ まさかた IAML日本支部支部長)



演奏会にて④

IAML/IMS 2009 Amsterdam

藤堂雍子

公共図書館と音楽院が隣接

到着翌朝国立美術館で、楽しみにしていたフランドル絵画を堪能。その足で駅前の運河の袂を東埠頭に向かうと、ほどなくモダンな公共図書館と並んでこれも移転して日も浅い音楽院(旧スヴェーリンク音楽院)に辿りついた。スタッフから「お昼がまだならお隣の7階でどうぞ、その間に会議登録準備しておきます」と勧められ、公共図書館の最上階に向けてエスカレーターを上り、両側に見える各フロアの設えに圧倒された。最上階に上り詰めると、運河に向かって街を一



公共図書館内部

望できるすばらしいテラスが張り出していて、食堂が広々とフロアを占め、食材が市場さながらに並び、これが図書館?と驚いた。バイキング式、調理は目の前のオープンキッチンで、というスタイル。エントランス脇にもカフェ、案内カウンターの側に誰でも弾けるピアノがさりげなく置かれ、地下1階には児童図書室、吹き抜けから見守れて、1日親子連れで図書館で過ごせる仕組みだ。都立の日比谷図書館や麻布の中央図書館に、こういうスタイルが望めるかしらん?毎日のようにこの食堂(会議参加者は優待割引)やセッション会場に通いつつ思った。

カウンシルミーティングと総会

翌5日(日)午後からカウンシルミーティングが始まった。以下要点のみ、木曜日2回目のカウンシル、最終日の総会もまとめて支部会員にとって重要なことを列記する。1)本部新事務局長、電子ニュースレター新編集長の公募、2)会計から会費納入期限厳守の要請があり、2011年の会費は、機関会員がEuro 60からEuro 65、個人会員は、Euro 36からEuro 37へ値上げ提案、機関会員費についてのみ質疑があり、総会でEuro 62で承認された。3)2010年は、3年毎の改選を控えている。会長候補は、長年プログラム委員長の任にあったJ.カサロ(米:ピッツバーグ大学)と、現事務局長のR.フリーリ(ニュージーランド)。副会長4名の候補は、S.フラビア(ポーランド)、A.ゴードン(英)、J.エックルー(ベルギー)、E.ディヴィス(米)、2期目候補として、J.バーク(スペイン)とJ.ランプレヒト(独)の6名。候補者履歴(写真付)と投票用紙は、Fontes 56-4に同封し郵送される(併行してWebsiteからの電子投票も可能)。投票有効期限は5月1日。結果は、6月末モスクワ大会で公表される。4)Fontesは、アムステルダム報告、アジア特集(日本も寄稿)、索引編纂の企画概要説明。5)会費納入、選挙投票手段、Fontesの電子化について技術・運用の双方で特別検討課題(Ad Hoc Comitee)となっていたが、Fontesは本年第4号から(毎年第4号のみ)pdfファイルでプリントアウト可能な版が始まる。6)年次会議で非会員の発表者には旅費を基金化し、補助することも検討中。7)RILMとRIDIMの委員メンバーに、Th.レイブニッツ(RILMオーストリア)とCh.バンクス(RIDIM英)・L.プギン(同スイス)へ、一部交代があった。8)著作権委員会座長はF.リバ(伊)からH.フォークナーが引き継いだ。フォークナーはかつてBBCオーケストラライブラリアンで、現在は、R.ヴォーン・ウィリアムズ及びディーリアス・トラストに所属している。著作権実務を演奏者と作曲者の立場で蓄積している人材だ。9)プログラム委員会のメンバーもP.トンプソン、故W.クリューガーから、A.ゴードン、M.フィンガーフットに移行。10)会議プログラム印刷が、会議前にどこまで必要か、手間と出費

が問題提議された。今年 IMS とのダブルプログラム発行で問題噴出と推測される。登録前の案内プログラムはより簡易版になり、適宜 Website で更新し、会議場で最終版が印刷配布となるだろう。11) デンマークとノルウェー支部から将来の IAML についてのアンケート調査提案が説明されようとしたが、プログラム委員会が既に準備（会議後 Website で公表）している年次会議についてのアンケートと時期も内容も重なり、混乱を避けることも指摘され却下された。このアンケート結果は、来年モスクワで公表される。

夕刻音楽院 B. ハイティンクホールで、ジャズセッションを挟んでオープニングセレモニーの後、公共図書館 7F 食堂 La Place で、ビュフェ。

日本支部からの会議出席者は、金澤正剛、樋口隆一、井上公子、関根和江、劉薇各氏と筆者の6名。日程後半に IMS での発表を携え、沼野雄司氏も加わった。

海賊湾岸のセイレンに擬えて

6日(月) オープニングセッションは、ハーグ王立図書館のコレクションとサービス部長から「海賊湾岸のセイレン」と題する基調講演があった。10日ほど前に急逝した M. ジャクソンを「ポップ界の著作権王」、急進するデジタル革命における犠牲の象徴として引用し、メディアを海の精セイレンに擬えている。海に呑み込まれることなく海賊(我ら図書館?)が波濤を乗り切るにはどうするか? 17世紀から今日までのオランダの新聞デジタル化を戦略的に推進、またオランダ劇場研究所の要請と協力を得て1900-1950年の期間に出版された楽譜(まだ70%は著作権保護期間にあり、出版社と協議しなければならない)のデジタル化を果敢に推進している例を挙げた。フルテキストは会議後わずか2週間でUPされた電子ニュースレター最新号(v.33)に掲載されている。

IAML ヘッドライン情報

続いて参加者全員に関係する専門情報トピックスが短信の形で報告された。J. ロバーツ(カリフォルニア・バークレイ校)はニューグロヴ音楽辞典のオンライン更新について、OUP社が、ニューヨークに事務所を移しL.マーシーを中心にIAML, IMS 他の学会との月例会議を設

けた。② G. オストローヴ(米 LC)は、「典拠データに機械/人の双方がアクセスできる新サービス」について、LC(米), BNF(仏), DNB(独), TELplus(EU)など主要典拠ファイルとリンクするVIAF(international)Web テスト版(OCLC 提供)登場などを解説¹した。典拠コントロールされた人名や将来は「音楽関連件名」をカタログ用やシステム上だけでなく、アクセスできることが目指されている。③ A. ゴードンは(英 BL)、M. ジョーンズの代理で、音楽作品のユニホーム・タイトルを上記プロジェクトに組み込めるかについて現時点での疑問点を投げかけた。④ M. ジャンティルテデッキは、「モーツァルト書簡集」(参照 IAML Newsletter v.32 p.4)パイロット・プロジェクトを解説補足。

オランダの音楽：伝統

午後の基調講演では、満席の音楽院ホールに

現れた T. コープマンが、ハープシコードを側らに据え、「オランダには収集の長い歴史がある」と切り出し、RISM



は私的コレクションを対象としていないことを指摘し、自身を含めた収蔵楽譜とそれに纏わる蘊蓄を、彼の演奏さながら、独特の生き活きと舌なめずりするような楽しそうな語り口で話し、かつ演奏してみせた。



コープマン
(上・左ともⒹ)

午後後半は、各国支部報告が例年の通り発表されたが、いつも時間不足になる。直前になって「短縮して」と迫られ、報告者全員は大あわて。用意された全文は、いずれ Fontes 56-4 に掲載されるが、まずは電子ニュースレター v.33(既報写真付)短縮版でご覧頂こう。

ポータルとアーカイヴ

7日(火)「ポータルとアーカイヴ」と銘打った

アーカイブと音楽ドキュメンテーション部会及びプログラム委員会共催セッションでは、まず、パリのシテ・ドゥ・ラ・ミュージック（パリ市公共音楽図書館）から国立機関と連携する舞台芸術アーカイブ：「フランスのオーケストラ」²、及び「ワールド・ミュージック」、2つのポータルサイトの進捗が紹介された。前者は、伝統的なオーケストラのサイトで歴史やコンサート案内をめざしているが、ワールド・ミュージックのサイトは、所謂世界の民族音楽や、スペクタクルの紹介で、OAI (Open Archives Initiative):Protocol metadata harvesting³ を試用している。AVデータの自動収集、メタデータを交換するプロトコルを用い、Javaを活用して、そのテクノロジーの成果発表が主旨であることが視われたが、サイトとしては初期段階と見て取れた。フロアのベテランから、ユネスコの品質の高いAV資料等を引き合いに、ソースの選択やネットワークの必要性など、助言を受ける場面もあった。一方、「ギリシア音楽図書館における1870年から1960年までの歌曲のデジタル・アーカイブ」は、図書館開設の19世紀後半以降現代まで90年に渡り収集された写真、ビデオ、楽譜、また多様なポピュラー歌曲資料6000曲のデジタル化が進んでいる⁴。一方、書誌委員会とプログラム委員会セッションでは、「手書き楽譜の文化」をテーマとし、フランス国立図書館からの報告「音楽院コンサート協会1828-1967」を聴いた。この時代の音楽院オーケストラの歴史的資料は、国立図書館がドキュメントを含め管轄していることはよく知られている。手書きのオーケストラ・パートや演奏指示など、とりわけベートーヴェン作品をフランスに紹介したことで知られるFr.A.アブネック⁵指揮時代(1828-1848)の交響曲手書き楽譜は、当時の演奏実技の実際を知り、ベートーヴェン受容の点でも貴重な手がかりとなる。

オランダの音楽：現代

2日目にも、基調講演が準備されており、オランダを代表する現代作曲家、L.アンドリーセン(1939-)がインタビューアールと共に登場し、コンサートで演奏される自作について、また国際的な作曲法教師としての持論を語った。

中央駅の北側通りで張り出すように新設されたミュ

ージック・ヘボウ大ホールで、アンドリーセンのコンサートが夕刻から催された。ジャズシンガー、サクソ、ブラスバンドのアンサンブル「M is for Man, Music, Mozart (1991年作曲⁷)」を中心に据えた彼の3作品とJ.ルーケンスの作品でコンサートは構成され、熱烈な拍手で終わった。ネーデルラント・ダンスの流れを汲むのだろうか、裸体群像のビデオを伴う上記作品は、演奏中も客席からどよめきが聞こえてくる、いささかヘビーな大作だった。夜風に吹かれて広大な運河沿いを街の基点である駅までそぞろ歩き、ホッとひと息ついた。

多国籍コレクション

研究図書館部会「多国籍コレクション」と題されたセッションの最初は、バーゼルに在るP.ザッヒャー財団所蔵の「R.グルムバッヒャー・コレクションの形成」をM.マッキオーネ(ローマ大学)が発表。2004年に81才で没したスイスの音楽愛好の銀行家が50年間に渡り集めたコレクション。調性から無調にいたる広範囲な作曲家自筆譜で収集の特徴を分析。S.B.ドルセイ(米ノースカロライナ大学)は、「N.ブーランジェと米国の初期女性作曲家L.タルマ」の報告。N.ブーランジェを米国に最初に招聘し、自身もフォンテンブローのアメリカ音楽院で学び、かつ教えた。LCとフランス国立図書館所蔵の500通に及ぶ書簡コレクションは、親密で活発な永年の交流関係を立証する。セッション最後は、M.ブローナ(ポーランド国立シヨパン研究所)による「生誕200年を迎えるシヨパン2010」の発表。写真、録音資料をワルシャワのシヨパン博物館と協力し集大成し、自筆譜、書簡、スケッチは無論のこと、近年の出版譜、研究書類、国内コンクールやフェスティバルのみならず、国外の関連イベントの資料も収集しIAMLを通じ公表するヴィジョンを披露した。散逸を避けることを命題とし、情報センター機能を、と抱負を述べた。IAMLワルシャワ会議は2005年だったが、これからが東欧の情報社会成長期のだろう⁶。

コア・コンピテンスか？

8日(水) サーヴィスとトレーニング委員会「専門職あるいは非専門職のためのトレーニング」では、まず、J.ヴァルク(ロッテルダム市公立図書館)が「地方公共図書館での非音楽専門

ライブラリアンのための短期研修：初心者のための音楽」と題し、音楽バックグラウンドのあるライブラリアンの欠落を、一般のライブラリアンが補完するための短期研修の事例を報告した。視聴覚資料・楽譜など音楽特有の資料の特徴や目録のしくみ、活用方法の違いを挙げ、公共図書館ニーズとして、ポピュラー音楽の楽譜や、インターネットから midi ファイルを如何に入手するかなども必須であったと述べた。他方、J. ディエト（バイエルン州立図書館）は、「シュトゥットガルトのメディア大学専門課程で、修士課程学生を対象としたミュージック・ライブラリアンコース設置」を報告。図書館及び情報マネジメントの学士、及び修士課程に提案している。修士課程は4期（2年）継続し、図書館学、ドキュメンテーション、あるいは情報マネジメントで学位取得課程あるいはディプロマを求め、音楽情報マネジメント（MIM）と互換する単位を含んでいる。つまり外部からの参加者のための専門トレーニングとしても有効な提案となっている。MIMの単位は、冬期にもおかれ、「音楽の目録法」、「音楽ビジネスと音楽サービス」、「デジタル音楽図書館」、「デジタル音楽アーカイヴ」を含む。今年11月から3ヶ月間インターネット教育も実現する。来2月には2週間の集中セミナーもある一方、さらに、メディア大学の夏期学校期間（5月）に、英語でのコースも予定されている。シュトゥットガルトでのこれらの音楽図書館学の組織化は、亡くなった W. クリューガー教授が続けてきたことに外ならない。他にもライブツィッヒ、ハノーヴァーで音楽図書館員養成コースがある。一方米国で現在音楽図書館学教育に携わっている J. ワグスタッフ（イリノイ大学アーバナ&シャンペーン校&英オックスフォード大兼務）は、MLAの詳細なコア・コンピテンス⁸や自身のカリキュラム⁹の解説をした。もともと1990年代企業経営戦略用語として生まれたコア・コンピテンス^{8b}方式は、硬直性をもたらす危険もあることを指摘し、日々職務内容が進化しており、図書館専門教育は、常に可変的進行形でなければならず、始めにシステムありきではないと彼は終始物静かに述べた。自著の近刊案内を8月に示した⁹。

Hofmeister XIX 過去と現在

9日（木）書誌委員会で、昨年プロジェクトの終結宣言をした「Hofmeisterの歴史的経緯」を J. イェーネケ（ベルリン国立図書館）、「HofmeisterXIX 遂行」Ch. バンクス（英アバディーン大学）、そしてこの「DBを使ったブラームスとマーラーについて」P. バンクスと K. ハミルトン（RCM）が報告した。20年前（1987）に古書業 Dan Fog 社が19世紀印刷楽譜出版目録のDB化を提案したことから始まった。原本から機械可読への変換は、印字読み取りが難しく、専従スタッフが33万件のレコード量に耐えきれず（1829-1900年の月刊出版目録）、構成メンバーの出入りもあった。結果、IAML、オーストリア国立図書館、ロンドン大学ローヤル・ホロウェイ校などが共同で引き受け、サーバーは現在ロンドン大学にある¹⁰。19世紀出版楽譜書誌情報であって、所在情報ではない。しかし、作曲者、タイトル、出版年、出版地、分類から検索・活用すれば、マーラー作品の1880-1920年の出版年代の特定が可能となり¹¹、ブラームスの「愛の歌 op. 52」4重唱&ピアノ4手版（1869）についても、他の編曲版の年代特定が可能となるという事例が報告された。1900年以降の出版情報のデータベース化をウィーン国立図書館で今後引き受ける可能性なども言及された。

夕方のコンサートはイランを含むオランダの現代合唱作品。当地はユダヤ文化と隣り合わせの街でもあることを感じた。

音楽教育機関それぞれの現場で

10日（金）音楽教育機関図書館部会で「書誌とインターネット」がテーマ。IMS スイスの役員でもある D. バウマン（チューリヒ大学）は、教師や学生にとっての学習環境の変化を挙げ、音楽学研究者育成に沿った戦略的な方法を統計資料を挙げながら説いた。続けて「図書館と世界の音楽情報：図書をキープすること、我らの価値を保存すること」J. ゴットリーブは所属するジュリアード音楽学校で2006年からWorldCatを導入し、OCLCが教育資源として提供している“世界の音楽情報”を使い、印刷物と電子情報を双方使って教育の補強をしている。自身の近著¹²の中でもジュリアードでの演奏家のための有効

な資源と検索技術の具体例をデモンストレーションしていて、インターネット情報の具体的評価方法に言及している。一方、ワシントン D.C. にも近いジョージメーソン大学の音楽学部リエゾンライブラリアン、S.ゲルバーは、「[図書館に]ちょっと立ち寄って音楽[書誌]学を取り込んでみよう」という講座を2007年から始め、アクティヴな図書館サービスとして、レファレンス担当が入学時にオリエンテーションやインストラクションするような内容を、短期講座で常設し、収書のプロセスに学生や教員を協力メンバーに加え、館内の設備デザイン変更にも学生参加させる、など身近な図書館への足がかりをつける工

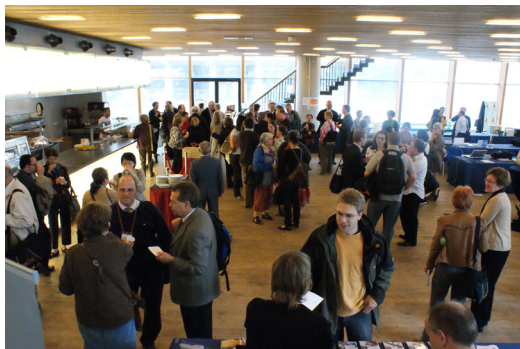
夫を披露した。デスクワークではない演奏や舞台芸術畑とアカデミックな図書館活用にも行動様式に距離があり、日常的に音楽図書館が身近であるためのステップ作りは、音楽演奏家教育機関として常に課題である。

午後の総会兼クロージング・セッションでは、W.クリューガーとA.レーンを偲ぶメッセージ、そして来年のモスクワ会議に向けてプロモート・ビデオ(会議HPもUP¹³⁾) 上映もあったことを付記しておこう。会議全日程は終了し、ダム広場の一角にある伝統的なクラスナポリスキー・ホテル「冬の庭」でのフェアウェルは、生演奏やダンスもあるにぎやかなディナーとなった。

注

- 1 <http://id.loc.gov/authorities/>
<http://www.oclc.org/research/projects/viaf/>; <http://viaf.org/>
- 2 <http://www.viedesorchestres.fr>
- 3 <http://www.openarchives.org/OAI/openarchivesprotocol.html> 国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課で日本語訳出している。 <http://www.nii.ac.jp/irp//archive/translation/oai-pmh2.0/>
- 4 <http://digma.mmb.org.gr/Default.aspx>
- 5 Habeneck(1781-1849) は、マンハイム宮廷楽隊にいた父の元から早期にフランスに留学し、パリ音楽院でオーケストラ指導に当たったヴァイオリン奏者。ベルリオーズの回想録の中での評価は低い。
- 6 <http://en.chopin.nifc.pl/chopin/main/inf>
- 7 主要出版は、Boosey & Hawkes、Donemus
- 8 Core competencies and music librarians / prepared by David Hunter on behalf of the Library School Liaison Subcommittee of the Music Library Association. April 2002; http://www.musiclibraryassoc.org/pdf/Core_competencies.pdf
- 8b <http://www.atmarkit.co.jp/aig/04biz/corecompetence.html>
- 9 Outline of course LIS530ALE in Music Librarianship and Bibliography (Syllabus for Spring 2009)/ John Wagstaff; 近著 Music librarianship: a bibliography of principles and practice / John Wagstaff Ashgate, 2009 ISBN: 1859281346 ; 978-1859281345
- 10 <http://www.hofmeister.rhu.ac.uk/2008/index.html>
- 11 <http://www.cph.rcm.ac.uk/MahlerCat/pages/index.htm>
- 12 Music Libraries and Research Skills / Jane Gottlieb. Prentice Hall, c2009 ISBN-10: 0131584340 <http://pulaski.lhi.is/bokasafn/Conference/Jane.pdf>
- 13 <http://www.iamlcongress2010.ru/>

(とうどう やすこ IAML 日本支部副支部長)



ロビー風景Ⓜ



閉会式Ⓜ

IAML/IMS アムステルダム大会 2009 に参加して
大わらわで駆け抜けた水曜日

樋口隆一

アムステルダム大会は、IAML と IMS (国際音楽学会) の合同大会ということで、延べ 500 名近い参加があり、過去最大の大イベントとなった。会場はアムステルダム音楽大学と、隣接するパブリック・ライブラリーのホールや会議室を総動員せざるをえず、主催者であるオランダの実行委員会の苦勞が偲ばれた。私自身も両方の団体で役員をしているため、たくさんの会議を渡り歩き、さらに司会やら発表もあったため、まさに大忙しの 1 週間であった。反面、二つの団体の要人たちとの交流が効率的に行われたため、非常に充実した大会となったことも事実である。

私自身のお役目を述べると、IAML 関係では、RILM の日本国内委員会である音楽文献目録委員会委員長のほか、まだ国内委員会が存在していない RISM にも、2006 年以來個人的に参加して、日本の IAML に情報を伝達する努力をしてきた。これは、委員長がライブツィヒ・バッハ・アルヒーフのクリストフ・ヴォルフ所長であるため、「新バッハ全集」以来の長年の交友が役に立っている。フランクフルト本部のクラウス・カイル所長には、私が明治学院大学の大学院生たちと進めてきたデータ入力ソフト Kallisto の日本語マニュアル作成の仕事がすでに最終段階に入っていること、日本音楽学会、IAML 日本支部、音楽図書館協議会によって「日本の音楽資料」委員会が発足することなどを報告し、喜ばれた。



RILM 編集長
Barbara Dobbs-Mackenzie

事務局長のマリア・ローズさんと隣あわせて座っ

RILM に関しては、事務局長のバーバラ・ドブス・マッケンジーとの再会を喜んだほか、最終日のフェアウェル・ディナーでは、たまたまニューヨーク

のため、新しい入力ソフト Ibis のことなど、楽しく情報交換ができたのも幸いだった。日本の RILM 事務局でもお手伝いいただいている福中冬子さんとも親しいらしく、彼女が明治学院大学でも講師をしてあげていることなど、会話が弾んだ。彼女自身もすぐれたフォルテピアノ奏者ということで、明治学院バハ・アカデミーにおける古楽器によるベートーヴェン・シリーズのことなどをお話して盛り上がった。

私自身がいちばん忙しかったのは、8 日 (水) であった。朝の 9 時から、IMS-Session “Asia” の司会を仰せつかっていた。アジアの音楽に関してはあまり知識はないのだが、なにしろ IMS の理事のひとりなので、プログラム委員会からのたつての頼みに引き受けざるを得なかったわけだ。ところがその内容は大変興味深く、大いに役得を実感したしだいである。

フランスの『樂記』の研究者ヴェロニク・アレクサンドル・ジュルノーの発表は、古代中国の琴タブラチュアの解説についての報告。台湾のワンチュン・リーの発表は、中国本土では消滅してしまった二四譜が、台湾の人形劇の音楽でいまだに使われているという興味深い報告だった。またアメリカのジェレミー・グリムショーは、アメリカの大学でのガムラン音楽の教育と研究についての報告。それぞれパワーポイントによる画像と音楽をふんだんに使いながらのプレゼンテーションが興味深かった。

11 時から、IAML/IMS 合同 Session “Libraries and Collections” が始まったが、こんどは自分が発表をする番だ。トップバッターはキエフから来たエレナ・ジンケヴィチ。昨年 9 月に、彼女が主宰する国際シンポジウムに招待されたばかりだったから、ウクライナ風の熱烈抱擁で再会を喜び合ったのはいうまでもない。クリストフ・ヴォルフが新発見したことになっているベルリン・ジグアアカデミーのコレクションは、ウクライナやロシアでは昔からよく知られていて、演奏にも利用されていたという内容。欧米中心の音楽学に対する暗黙の批判が込められていた。

ボローニャのアルフレード・ヴィトロとバークレーのケイト・ヴァン・オーデンによる発表は、

ボローニャのマルティーニ神父が所有していたルネサンス音楽コレクションの再発見に関する報告。マドリード大学から来たラウラ・デ・ミゲル・フェルテスとルース・ピケル・サンクレメンテというふたりの若い女性は、同大学が所蔵する1825～1925年のイタリア・オペラの手稿譜コレクションについて報告した。

セッションの最後は、いよいよ私の番だ。

「東京のモーツァルト・スケッチシート。彼の最初のプラハ旅行(1787年)以後の創作期のための鉱脈」というのが、ドイツ語に



よる発表の題名である。前田育徳財団尊経閣文庫が所蔵するモーツァルト・スケッチシートについては、すでに2006年に明治学院大学で行った国際シンポジウムで発表し、その報告は『進化するモーツァルト』(春秋社、2007年)にある。今回はその中から、前田利為侯爵による自筆譜蒐集の詳細について報告し、さらに多岐にわたるスケッチシートの内容が、それぞれ具体的にいつ頃書き込まれたかについて、私なりに推定を試みたのだった。

幸いにしてパワーポイントを使った発表は楽しく過ぎ、ドイツやスイスの研究者が意見を言いに来てくれ、「どの雑誌に出すんだ」などと聞いてくれた。その後もメールによる論争が続いており、ある段階に来たら、学会誌への寄稿を考えねばならない。嬉しかったのは、昨年、明治学院大学に招聘教授で呼び出した『新ベートーヴェン全集』のエルンスト・ヘルトリヒ博士夫妻が、私の発表を聞くためにわざわざドイツのボンから車を飛ばして来てくれたことだ。

残念ながら、発表が終わっても彼らと歓談を続ける時間は許されなかった。昼休みには隣接するパブリック・ライブラリーの会議室で、IMSの理事会が開かれているのだ。ノートパソコンをたたみ、コード類を取り外すのもそこに、隣の建物へと駆けつけた。

理事会はランチタイムなので、サンドウィッチを食べながら行う。朝からの労働でさすが

に腹が減っていたので、直径7～8センチもあろうかというあの大きなサンドウィッチを2～3個たいらげた。

理事会が終わると、次は遠足だ。幸い集合場所はホテルのそばだったので、とにかくパソコンなど荷物を部屋に置き、大急ぎで着替えると、運河沿いの集合場所へと急いだ。目的地別に何台もバスが並んでいるが、もうみんな乗り込み、ほとんど最後の客である私を待っていた。すると「先生～！」と黄色い声を上げながら、大柄な日本女性がふたり手を振っている。オランダ在住の明治学院卒業生が、先回りして待っていたのだ。ひとりはアムステルダム音楽大学でルーシー・ファン・ダールのもとでバロック・ヴァイオリンを学んでいる木村理恵(その後8月のブリュージュ古楽コンクールで2位になったらしい)。もうひとりは、オランダ人の弁護士と結婚してハーグに住む自称「ダッチ・ワイフ」のエミちゃんだった。バスの中からは好奇の視線。とにかく翌日のコンサートでまた会うことにして、ようやくバスに乗り込んだ。

バスが目指すのは近郊のハールレム。聖バーヴォ教会

には10歳のモーツァルトも弾いたというクリスティアン・ミュラ



一製の大オルガンがある。この教会には前にもいちど来たことがあるが、IAMLの遠足となると話は別だ。専属オルガニストの解説とミニ



Dr. Ernst Hertrich 夫妻→

コンサートで、このオルガンの透明な響きを楽しむことができた。

教会見学にはボンのヘルトリヒ博士夫妻も合流し、さらにバスが向かったのは郊外にある「メカニカル・オルガン博物館」。倉庫の一角のようなところだが、1909年製造というヨーロッパ最大の自動オルガン(クンケル製)が、轟音で鳴り響いた。



遠足の一行はバスでアムステルダムに帰るわけだが、私とヘルトリヒ夫妻は別行動。タクシーでハーレム市内に戻り、聖バーヴォ教会の近くで小さなビストロを見つけ、ワインの杯を傾けながら旧交を温めた。アムステルダムには電車で帰った。ほんとうはさらに、夜の9時からRILM主催のレセプションがあったのだが、東京駅のモデルとなった煉瓦造りのアムステルダム中央駅についたころにはさすがに睡魔が襲ってきた。ホテルに直行し、私の長い一日は終わった。

IAML 総会では金澤正剛委員長による日本支部の活動報告があったし、IMS 総会では、2012年の世界大会がローマで開催されることが決まった。IMS 理事会ではその次の2017年の世界大会も話題になったので、私は「日本での開催も検討している」と手を挙げておいた。前年の2016年には東京オリンピックも候補に挙がっている。東京になるか京都になるかは今後の検討課題だが、日本もそのあたりで開催しておかないと、他のアジア諸国の後塵を拝することにもなる。私としては、例年「京都賞」授賞式が行われる京都の国際会議場あたりでできれば素晴らしいのではないかと考えている。

(ひぐち りゅういち 明治学院大学)

* 9月7日に受領した原稿です。

IAML 2009 in Amsterdam. The excursion

関根和江

7月8日(水) 午後の遠足は、連日の緊迫した研究発表からひと息つく格好の機会となった。いずれも魅力的な選択肢¹の中から、筆者は、ハーレム Haarlem²のオルガン見学コースに参加した。

当日は、午前の発表を聞き、急ぎ昼食を済ませた後、3台のバスに分乗してアムステルダムを出発した。オランダの肝っ玉母さんによるガイド付きである。

バスは、アムステルダム中央駅近くで高速道に入った。西へ西へとひた走り、およそ20キロ先のハーレムを目指す。あいにく不安定な空模様ではあったが、つかの間の休息を楽しむべく、参加者たちは一様に晴れやかな顔をしている。

運河沿いの道からは、ところどころに点在する風車が見え、ここがオランダであることを実感する。市街地からさほどの距離ではないにもかかわらず、水と緑の田園が目の前に広がっているのも、新鮮な驚きであった。

オランダといえば誰でもすぐにチューリップ畑を連想しよう。チューリップ栽培は、17世紀にハーレムで始まったのだが、この地は、現在も栽培の中心地である。園芸農業が盛んで、シーズンになると、畑一面に色とりどりのチューリップが咲き誇り、有名な花祭りには花車のパレードが出るという。今は7月。すでに花の時期は終わっており、沿道からはその片鱗も垣間見ることがかなわなかったが、美しい花の季節に是非とも再訪したいものである。

窓外にたたくむヨーロッパの古い町並みを楽しむ間に、バスはスパーネル運河を渡って街の中へ。ほどなく、駐車場に到着した。

町の中央にあるグローテ・マルクト広場と、その一角に空高く聳え立つ聖バフオ教会³の美しい塔が、姿を見せる。高さ80メートルという。1980年から1985年にかけて改修工事が行なわれた教会は、全く古さを感じさせない。

ハーレムは、ノルドホランド州の州都で、17世紀オランダの黄金時代に中心的役割を担い、繊維工業、造船所、ビール醸造所で栄えた。特にリネンと絹はこの都市に莫大な富をもたらす。古来、広い広場と聳え立つ教会の存在は、そこが国の中心的な大都市であることを象徴するものであり、数世紀の時を経た今、広場に立って周囲を見回しても、当時の繁栄ぶりを容易に想像することができた。



静かな情緒あふれるこの区域は、車の進入が規制され、清掃が行き届いている。広い石畳の広場には、ゴミ一つない。昔の面影を意識的に保存しているのであろう。後期ゴシック様式の美しい教会、しゃれたカフェやレストランに囲まれていると、一瞬当時のこの町にタイムスリップしたかのような錯覚に捕らわれる。

教会の中に入ると、まず太い柱と高い天井に圧倒される。白を基調とした壁や柱に対して、赤を基調としたパイプオルガンは、装飾の少ない教会内で独特の存在感を放っている。

クリスティアン・ミュラー⁴ 作によるパイプオルガンである。

聖堂西側の壁全面を被うように作られたオルガンは、床からおおよそ30メートルの高さを誇り、25体の等身大の彫像によって(すべて、アムステルダム彫刻家 Jan van Logteren の作) 美しい装飾が施されている。尖塔からは、2匹のライオンがハーレムの紋章を抱いて会

衆を見守っている。



オルガンは、1735年に着手、1738年に建造された。以後何度か修理されたが、1959年から1963年にかけてデンマークの Marcussen 社によって大規模な改修が行われた。これによって、おおよそ90パーセントのパイプが原型通りに復元されている。また、その後 Zaandam のオルガン製造会社 Flentrop がメンテナンスを行なう際、チューニングをやり直したことにより、現在では、ほぼ創建時のままの響きが再現されるようになった。

実際に聴いた音は、ゆったりして、張りのある、均質な響きであった。

オルガンは、3段の手鍵盤とペダル、68個のストップ、5068本のパイプ(最長は32フィ



ート=11メートル)を備え、ケースは松材で、赤褐色に彩色されている。パイプは全て金属

製である。バロック作品を始め、現代作品まで対応できるようにチューニングされている。

1738 年、オルガンが完成すると、その評判はヨーロッパ中に広まり、多くの見物客がこの地を訪れた。観光スポットとして脚光を浴びたのである。1740 年 9 月と、1750 年にヘンデルが、また 1766 年 1 月には 10 歳のモーツァルトが、パリ、ロンドンへの旅行の帰途立ち寄り、このオルガンを演奏した。

教会では、毎年 5 月から 10 月の毎週土曜日と日曜日に礼拝が行われ、ミューラー・オルガンの響きが聖堂を満たす。

夏には、毎週のように市民オルガンコンサートが開催され、それを目当てにハーレムを訪れる人も多いと聞く。隔年で国際オルガン・コンクール⁵も開かれる。

教会内の見学を一通り済ませた頃合いを見計らい、オルガン演奏が披露された。目からも耳からもオルガンを楽しむという贅沢なひと時を過ごすことができた。これも IAML ならではの企画といえよう。聖堂を満たす大音響に身を震わす一方、耳をくすぐるような繊細な音色を堪能することができた。

演奏されたのは、以下の曲である。

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791):

Kirchensonate D-dur, KV 144

Johann Sebastian Bach (1685-1750):

Two choral preludes:

‘Herr, Gott, nun schleuss den Himmel auf’, BWV 617

‘Wachet auf, ruft uns die Stimme’, BWV 645

Jan Zwart (1877-1937):

‘Abide with me’

Johann Sebastian Bach:

Toccat & Fugue d-moll, BWV 565

余談ではあるが、Jan Zwart は、今会議の組織委員長 Fritz Zwart 氏 (MI-Netherlands Music Institute, The Hague) の御尊祖父で、オランダのオルガニストであり改革派教会の声

楽曲に基づいたオルガン曲を多数作曲した人である。

演奏者 Anton Pauw は、1991 年以來この教会の専属オルガニストの一人で、アムステルダムのスヴェーリンク音楽院で学んだ。卒業後、Ton Koopman, Jean Boyer に師事して、研鑽を積む。教会勤務の傍ら、ラジオ・テレビに出演、コンサート活動も行ない、CD をリリースしている。レパートリーは、バロックから現代までと幅広い。自らオルガン作品を作曲もする。

温かい人柄が窺える力演であった。



演奏の後で、オルガン横の狭い急勾配の階段を上り、オルガンを間近に見る機会が与えられた。チャーミングな演奏者から、直接オルガンの説明を聞くことができたことも得難い体験であった。

教会でのミニ・コンサートにすっかり癒された筆者を乗せて、バスは本日第2の目的地に向う。

運河に沿って進むにつれて、新しい建物の間に、時代を感じさせる趣のある切妻屋根の建物が点在するのが見え隠れする。耳を澄ますと、町のたたずまいそのものが、無言でその歴史を物語っているかのように感じられた。

次に案内されたのは、メカニカル・オルガン・ミュージアム Draaiorgel Museum であった。

1909 年に作られた博物館は、現在財団によって運営され、ヨーロッパ随一のメカニカル・オルガン Kunkels Orgel コレクションを有する。

古い工場跡地を利用したような空間に、無造作とも思える状態で置かれた楽器を、間近で見学するだけでなく、実際に演奏されるメカニクを、裏側から見せていただく幸運に恵まれた。



どのオルガンにも色とりどりの華やかな装飾が施され、回転木馬のように動くモニュメントもあり、オルガンの音を楽しむと同時に、人

形の動きを見ながら、幼い頃無心に遊んだ遊園地を思い出し、ひと時、密かにノスタルジーに浸る。



見学の合間には、ティータイムも用意され、茶菓がふるまわれた。おいしいチョコレートをいただき、幸せな気分を満たされながら、筆者は帰りのバスに揺られた。ハーレムと名残を惜しみつつ、オルガンの余韻を友として。

ハーレムの公式サイト：<http://www.haarlem.nl/>

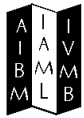
聖バヴォ教会：<http://www.bavo.nl>（オルガンの音が試聴できる）

メカニカル・オルガン・ミュージアム：<http://www.draaiorgelmuseum.org/>

注

1. Concertgebouw and Jordaan 2. Historical Amsterdam 3. Amsterdam School architecture 4. Organs in Haarlem 5. Holland a land of polders 6. Windmills in the Zaan area
- 2 ニューヨーク市マンハッタン区北部地区のハーレム Harlem の由来となった町である。こちらは 'a' が一つ少ない。
- 3 De Grote of Sint Bavokerk te Haarlem 聖バヴォ教会。聖バーフ教会（大教会）、シント・バヴォーとも訳される。1245年の記録に登場するという歴史のある教会だが、1347年と1351年の2回、火災により大被害を被り、1370年から1538年の長い工事を経て、現在の教会が建てられた。聖堂の床には約1500枚の煉瓦が敷き詰められているが、最古のものは15世紀まで遡ることができる。今年8月22日に、秋篠宮ご夫妻がこの教会を訪れ、歓迎の演奏会が開かれたとのニュースは耳新しい。
- 4 クリスティアン・ミュラー Christian Müller (1690-1763) は、ドイツ屈指のオルガン建造家である。当時、ネーデルラントでは、ドイツ人の建造家によって多くのオルガンが作られたが、ミュラーは、垂直の線を強調したオルガンを多数建造している。
- 5 次回の国際コンクールは、2010年7月6日から31日の開催がアナウンスされている。

（せきね かずえ 東京藝術大学）



おしらせ



■事務局長の辞任について

松下鈞事務局長は本年 10 月末日をもって休
会され、同時に事務局長を辞任されました。

役員会では、選挙の際に次点だった藤堂雍
子副支部長に対し、当面の間、事務局長代行
を兼務していただくよう依頼し、ご快諾いた
だきましたことをお知らせいたします。

■日本近代音楽館の閉鎖に伴う事務局移転
について

各種メディアでも報じられた通り、財団法人
日本近代音楽財団日本近代音楽館（館長
遠山一行氏＝ IAML 日本支部名誉会員）は、
2010 年 3 月いっばいで閉鎖、所蔵資料を明
治学院大学に移管することになりました。

同館は IAML 日本支部創設以来のメンバー
であり、30 年にわたって事務局所在館を担
当していただいておりますが、このたび、本
年 12 月末日をもって退会される旨の届けが提出
されました。

これを受け、2010 年 1 月以降、事務局連
絡先を事務局長宅に変更いたします（現時点
では事務局長代行宅となります）。各種ご連絡
は下記をお願いいたします。

事務局長代行：藤堂雍子

日本近代音楽館には、長年にわたってたい
へんお世話になりました。紙面を借りてあつく
御礼申し上げます。

■ "IAML 2010 Moscow" へのお誘い

来年 2010 年の IAML 年次大会は、
6 月 27 日より 7 月 2 日まで、モスクワ
の RAPA (Russian Academy of Public
Administration) で開催されます。

登録の最終締切は 5 月 15 日です。4 月 30
日までに早期申込された方は、登録料が割安
になります。

詳しくは下記ウェブサイトをご覧ください。
<http://www.iamlcongress2010.ru/>

なお、ロシアへの渡航にはビザが必要で
す。ロシア大使館のサイト (<http://www.rusconsul.jp/hp/jp/visa/visa.html>) にビザ
発給に関する情報がありますが、ロシア旅行
を専門に扱っている旅行会社に取得の代行を
依頼するのが最も簡単で無難です。

==== Postscript =====

諸般の事情により発行が遅れてしまいま
したが、アムステルダム特集をようやく皆様にお
届けすることができました。原稿を執筆してく
ださった方々、また快く写真をご提供くださ
った方々に、あつく御礼申し上げます。

日本支部ウェブサイトにアップした pdf で
は、写真をカラーでご覧になることができます。
紙幅の都合で紙媒体のニューズレターに掲載
できなかった写真もウェブ版には収録していま
すので、どうぞご覧ください。(末永)

<p>Newsletter —国際音楽資料情報協会日本支部 第 37 号</p> <p>2009 年 11 月 25 日発行 発行 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部 〒106-0041 東京都港区麻布台 1-8-14 日本近代音楽館気付 http://www.iaml.jp</p>
--

樋口隆一氏原稿 (p.10)
 関連写真



IMS - Session Asia
 Wan-Chun Lee



IMS - Session Asia
 Alexandre Journeau



IMS - Session Asia
 Jeremy Gramshaw

IAML/IMS - Session "Libraries and Collections"
 Elena Zinkevych